

岡田先生部内授業（1/10時間目） 体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 河野 古川 岡田 畠中 関川 山本 藤原 坪根 土屋 大川
常任理事 黒澤校長 西川校長

★「今日の授業から見えてきたこと」

- ①前半、（子供は運動をやる）教師は子供の姿を賞賛していく
- ②授業の途中で「高まりとは？」という発問をする
- ③後半の運動中には、「高まりそう？」という発問
- ④授業の最後に、一人一人の問い（高めるための問い）を出す
- ⑤第2時は問いを共有して、最初の高めるという目的（「高めたい」という目的）を確認していく。

1 授業者自評（第1時）

- (1) 言葉掛けを意識
「どうやっているの?」「何でこれやろうと思ったの?」「何が楽しいの?」「楽しい以外には?」
という言葉掛けを意識して第1時を行っていた。
- (2) 予想以上に動きが広がっていた
多様な動きをつくる運動的な動きの広がりではあったが、そこからどのように体の動きを高める
運動の学習につなげていくかが今後の課題となる。

2 本時授業について

- (1) プロモーションビデオを見ていた児童の様子から
藤原：ビデオを止めて、子供たちとじっくり内容を確認しながら動画を見てもよかったのではない
か？
畠中：4要素をおさえた後だったが、動画と4要素のつながりが見えにくかったので、4要素と動
画の運動が黒板で結び付けられていくとよかった。
関川：動画の中の運動が4要素に当てはめるのは児童にとっては難しそうだった。
「分けられる?」と問われると自信がなさそうだった。
鈴木：「これは、どの力?」という発問は難しそうだった。
土屋：動画を見終わった後に、子供同士では「これじゃないか?」というようなつぶやきがあった。
4つの要素と結び付ける働き掛け
坪根：何やっているんだろう?という「はてな?」はたくさん出ていて、子供からの発想はよく出
ていた。
大川：運動と4要素とのつながりを児童に聞くべきか聞かないでおくべきか？
- (2) 短なわを見て
鈴木：多くの子が2重跳びをいていた。
やってみようという姿が多く見られ、試す時間は十分にあった。
一人で、黙々と行う姿が多く、関わる姿は少なかった。
- (3) 長なわを見て
坪根：最初は長なわを行う子供はいなかったが、3人が取り組み始めると多くの子供たちが近く
に寄っていた。

最初は、回し方が速かった。「おいしい。」「回すの速い。」という言葉かけが多かった。
岡田先生が来てからは、子供の運動への取り組みが変わっていた。
→教師介入後に「リズム」や「タイミング」の意識が高まっていた。

(4) 平均台を見ていて

関川：岡田先生が「なんで平均台に来たの？」と声を掛けると・・・「やってみたいから」
全ての運動に取り組みたいからやっていた。
平均台の上にスポンジを乗せてから取り組む児童が増えた。
ほどよく、難しく子供たちにとって少し難しく感じる魅力的な運動であった。
岡田先生の言葉かけ（賞賛）で繰り返し取り組む児童が増えた。

(5) ボールを見ていて

大川：最初は、シュートをしている子が多くいた。
提示された、絵をシュートしている姿として捉えていた。
岡田先生の言葉掛けによって、子供たちは、ボールを投げ上げキャッチしたり、ボールを
投げ合ったり、ボール転がしたりする児童が増えた。
時間が経つと、的当てのように楽しむ姿やボールを蹴る姿も多く見られた。
ボールの運動の行い方は、具体的に示したりボールの運動の扱い方は検討したりする余地
がある。

(6) プロモーションビデオは児童の意欲を高めることにつながっていたか？

藤原：プロモーションビデオの意図をはっきりさせると動画を有効に使うことができた。

4要素を知るための動画？

運動への意欲を高めるもの？

授業での見通しをもたせるもの？

体の動きを高める目的意識をもつもの？

畠中：意欲を「やってみよう」と捉えるのかどうか？プロモーションビデオの意図としては、意
欲を高めることと問いをもたせることだったと思う。昨年度との違いは、目的意識をもた
せたところだと思う。

藤原：ボールの運動の行い方は、具体的に示してもよかったのではないかと思った。

古川：昨年度の自分の実践では、用具だけを準備し、行い方は児童に考えさせていた。

鈴木：4つの運動ではなく、2つの運動に絞ってもよかったと考える。

畠中：苦手意識をもっている子のために、いくつかの運動があることはメリットになる。経験す
ることで、課題を見出すことができる。

坪根：長なわや平均台は、やることが明確な運動であった。ボールは、学び方を身に付けたぐら
いの後に単元の途中で示してもいいのではないか？

関川：平均台やバンブーダンスは行い方が分かりやすい。第1時では、経験がないことが想定さ
れるので、入り口としては分かりやすい運動を提示したい。

ただ、子供たちはまず「やってみたい。」という思いが前面に出てくる。

藤原：今日の授業で大切なことは、やってみるものと疑問をもつことだったと思う。運動の行い
方が明確な方が問いは見出しやすいと考える。分かりやすい運動の経験を通して、教師か
らの発問で問いを誘発させることもできるのではないか？

「どうやったらできたの？」子供…えー？

古川：分かりやすい運動例は？

長なわ、バンブーダンス、平均台、ドリブル

関川：振り返りでは、子供たち結局分からないという反応だった？

「次から答えを見つけていきたい。」という子供の発言もあった。

山本：これまでは、工夫の余地がある運動がよい運動だった。今回は、運動の行い方が分かりやすい運動がよい運動と捉えていて捉え方が変わってきた。

岡田：児童の実態から考えると、どのようにすればいいか見通しをもてると取り組みやすかったのも、プロモーションビデオは有効であった。巧みを取り扱った経緯は無理やり感があった気がする。

山本：今日の動画だったら、動画に出てきた運動を全て行わせてもよかった。

河野：児童は、プロモーションビデオを見て、よく考えている様子だった。ただ、プロモーションビデオは「うわーやってみたい。」と思って、やりたいことをやっていくきっかけをもつ手だてよいと考える。第1時は意欲を高める時間にしたい。

藤原：あまり考えさせないのに、児童に問いをもたせる発問をさせるのか？

河野：前半は、とにかく行って楽しむ。後半は、「何でそんなことをしているの？」というようにメリハリをつけてもいいのではないかな？

藤原：プロモーションビデオを見た児童は、意欲を高くもつと考える。振り返りの時に「何でそう思ったの？」という問いを行い、第2時で思考を促す働き掛けを行っていくのはどうか？

古川：プロモーションビデオは、意欲をもたせることを強調していくのか？

畠中：4要素を本時で示したのはよかったのか？

岡田：今日の時点では、4要素を知らせたことはよかったかどうかは分からない。しかし、今後効果が出てくると感じている。

畠中：動画に、4要素のテロップを入れてもいいのではないかな？

古川：子供との問答が楽しいのではないかな？

藤原：今日の授業では、何が高まったという意識はなくてもよかったのか？

岡田：本時では、高まったという意識はなくてよいと考えていた。

河野：最初に4要素を確認して、子供との問答はなくてもよいと考える。

(7) 言葉掛けについて

畠中：「どうやっているの？」については答える児童が多かった。
「なぜこれをやろうとしたの？」については答えられないでいた。
「何が楽しいの？」「楽しい以外には？」については、楽しい以外の価値は見出しにくい様子だった。

岡田：やりたいように運動していた児童には、近くの子供たちを集めて「なぜやっているのか？」揺さぶりをかけながら働きかけていた。

畠中：子供は、なぜ揺さぶりをかけられているのかが分らないのではないかな？

岡田：「どうやってやるの？」という発問をして、安心感をもたせようとしていた。

山本：問いと賞賛のバランスが大事だと考える。岡田先生は、子供と一緒にいたので、子供とのかかわりの中で今後も

畠中：「知りたい」という問いがよいと思った。

河野：ほとんどの子が、「どのようにすればできるのか？」という問いが多かった。子供たちは、そのような思考になることが実証授業で見えた。
授業の前半ではやってみる→教師の賞賛→授業の途中（後半）で、「高まった？」と聞くのもいいと思った。

大川：今日の「次回、運動を決めてやりたい人？いろいろやりたい人？」と聞いた後にその理由を問い返すことで、どのような目的で取り組んでいるか子供たちの考え方を確かめたり共有したりするきっかけができたのではないかと考える。
第2時まで、「運動を決めてやりたい人？いろいろやりたい人？」の理由を共有したい。

河野：自分の苦手なことを知りたいという児童もいた。

河野：単元を通して、目的意識はもたせていくけれども、第1時で抽象的ではあるが高めるための目的意識は投げかけていくことは、その後の学習につながっていくと考える。

関川：「高まった？」ではハードルが高い「高まりそう？」の方が答えやすい。

2時間目がどこからスタートしていくのか決めていった方が働き掛けがしやすい。

★「今日の授業から見えてきたこと」

①前半、(子供は運動をやってみる) 教師は子供の姿を賞賛していく

②授業の途中で「高まりとは？」という発問をする

③後半の運動中には、「高まりそう？」という発問

④授業の最後に、一人一人の問い(高めるための問い)を出す

⑤第2時は問いを共有して、最初の高めるという目的(「高めたい」という目的)を確認していく。

山本：どのようになりたいかという具体像が見えないと目的意識は見出せないのではないか？

河野：目的とは「高める」第2時には「高める」というところにもっていきたい。

岡田：藤原動画で「どうなっていきたい」という目的意識をもたせたい。

藤原：藤原動画は、6分30秒程度。

関川：藤井動画・藤原動画の2つの動画を活用していくのはどうか？

(8) 2学期の実証に向けて

畠中：6年生児童(4分の1が持ち上がり) 11月上旬実施予定 10時間中5～6時間目
スタートから選択(事前アンケートの実施)

ICTの利用・活用(運動例動画)→選択時に活用、運動撮影動画を担任に提出できている。
子供たちが学習計画をつくっている場面を公開したい。

1動画(もとの動き)あたり数秒

(9) 子供たちが考える学習計画について

ロードマップで立てる？

3時間ごとに立てる？

次の時間何をするかを決めさせていく？

計画は修正してもよい(自己調整)

学習過程を3時間まとまりで計画をつくる？

ICTを使って集約していく、集計はしやすい。

3 夏季合研までに・・・

抄録(ほぼできている)

動画入りのパワポ資料

ロードマップの作成手順

部会資料

2学期の実証を入れるかは未定

4 実証授業までに・・・ ※3チームに分かれて作成

運動開発

5 常任理事の先生より

子供が何をすればいいのかが明確にならないと「どうすれば、できるようになるのかな？」という問いは生まれない。

授業の途中で「高まりとは？」を考えるきっかけを設けることは、『何をするのかを明確にしていくきっかけ』になるのではないかと部会の協議を通して感じた。

もう一度、多様な動きをつくる運動と体の動きを高める運動の違いを捉えていく必要がある。体の動きを高める運動では「高まりを追究していく」ことが大切になってくる。